

D部門論文委員会意見交換会

2014年8月28日(木)

12時10分～13時10分

東京電機大学東京千住キャンパス 第5会場

2号館6階2601教室

1

議事次第

- 論文委員会の体制紹介・編修長・英文編修長あいさつ

森本和文誌編修長

大石英文誌編修長

- 最近の和文論文誌委員会・英文論文誌委員会の活動について

- 査読マニュアルについて

- 和文論文誌・英文論文誌の論文投稿・掲載状況について

- 電子査読システムの運用状況について

寺田和文誌副編修長

- 昨年の意見交換会での意見に対する報告

- 論文委員意見に対する回答

森本和文誌編修長

大石英文誌編修長

- フリーディスカッション

終了予定:13:10

2

論文委員会の体制紹介・
和文論文誌編修長・英文論文誌編修長
あいさつ

論文誌D(産業応用部門誌) 編修長(和文誌)

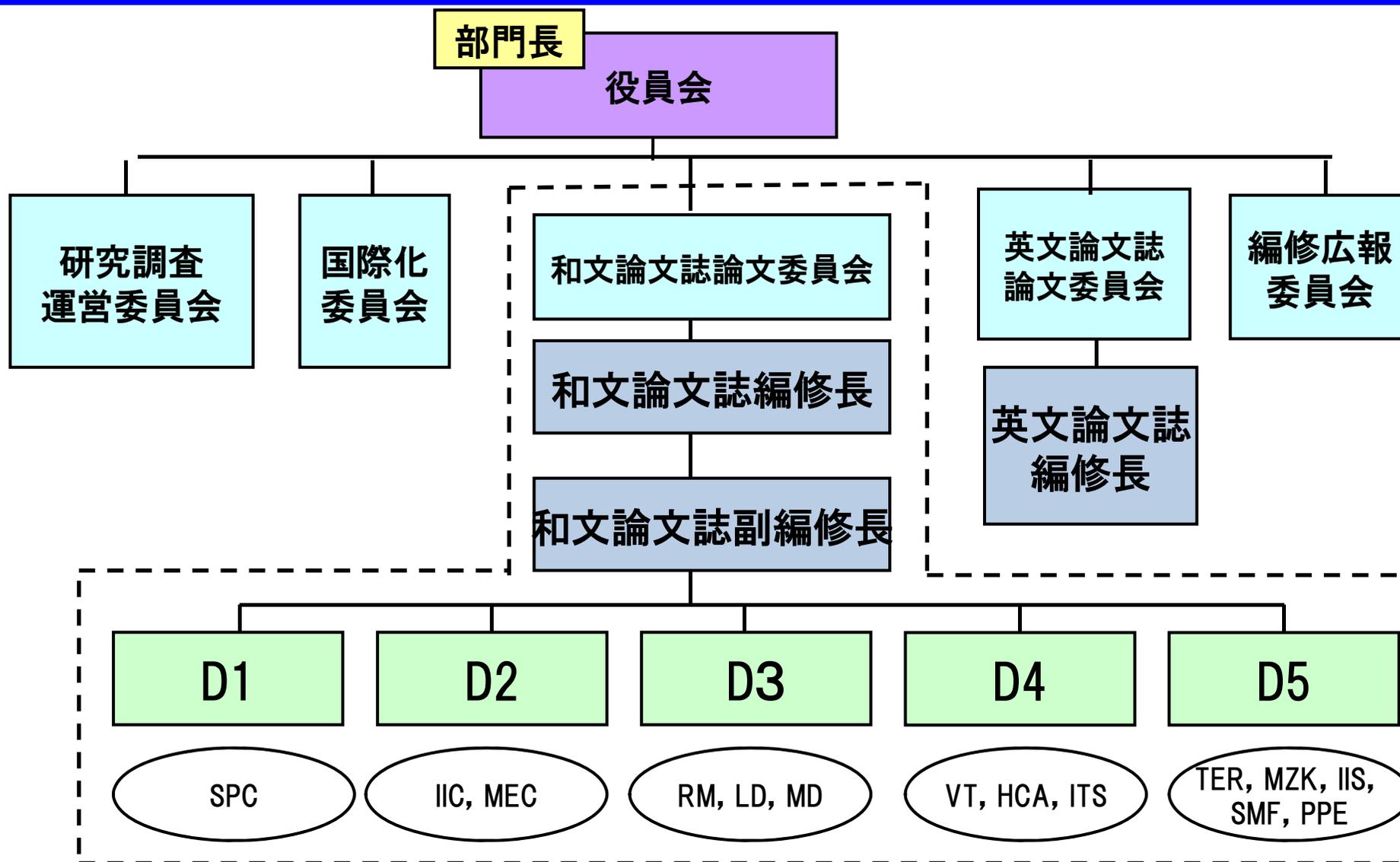
森本 雅之 (東海大学)

英文論文誌 編修長(英文誌)

大石 潔 (長岡技術科学大学)

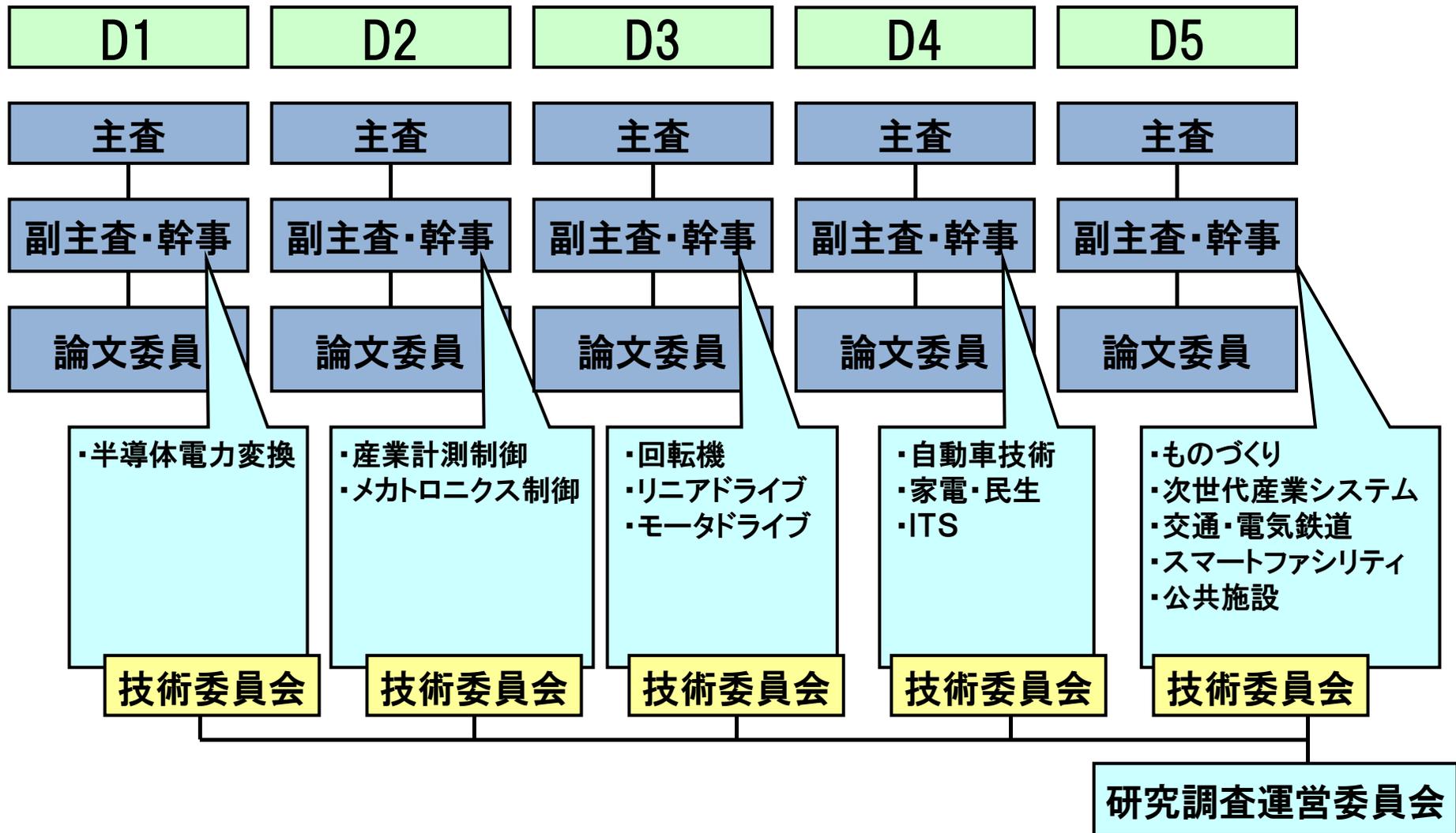
3

D部門における論文委員会



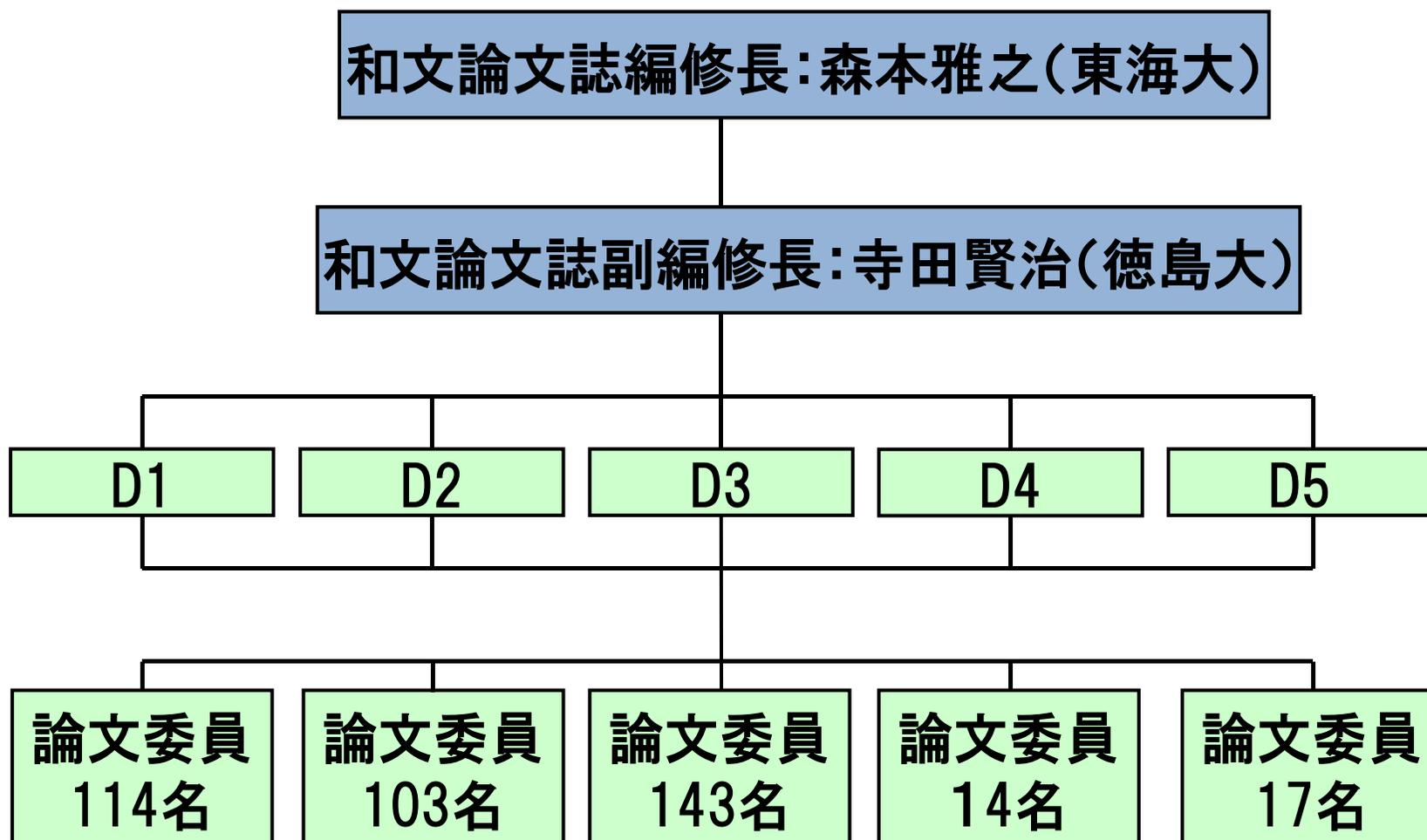
4

和文論文誌論文委員会の組織



5

和文論文誌論文委員会の構成



6 2014年度和文論文誌 論文委員会委員

| D1 | 役職 | 氏名 | 所属 |
|----|-----|-------|----------|
| | 主査 | 中沢 洋介 | 東芝 |
| | 副主査 | 三野 和明 | 富士電機 |
| | 幹事 | 森實 俊充 | 大阪工業大学 |
| | 〃 | 和田 圭二 | 首都大学東京 |
| | 〃 | 星 伸一 | 東京理科大学 |
| | 〃 | 伊東 淳一 | 長岡技術科学大学 |

| D3 | 役職 | 氏名 | 所属 |
|----|-------|-------|-------------|
| | 主査 | 樋口 剛 | 長崎大学 |
| | 副主査 | 廣塚 功 | 中部大学 |
| | 幹事 | 森下 明平 | 工学院大学 |
| | 〃 | 山本 吉朗 | 鹿児島大学 |
| | 〃 | 山本 修 | 職業能力開発総合大学校 |
| | 〃 | 山本 康弘 | 明電舎 |
| | 〃 | 榎本 裕治 | 日立製作所 |
| 〃 | 坂本 泰明 | 明電舎 | |

| D2 | 役職 | 氏名 | 所属 |
|----|-------|-------|--------|
| | 主査 | 高橋 悟 | 香川大学 |
| | 副主査 | 駒田 諭 | 三重大学 |
| | 幹事 | 満倉 靖恵 | 慶應義塾大学 |
| | 〃 | 内村 裕 | 芝浦工業大学 |
| | 〃 | 藤本 博志 | 東京大学 |
| 〃 | 熱海 武憲 | HGST | |

| D4 | 役職 | 氏名 | 所属 |
|----|-----|-------|---------|
| | 主査 | 浜松 芳夫 | 日本大学 |
| | 副主査 | 結城 和明 | 東芝 |
| | 幹事 | 真田 雅之 | 大阪府立大学 |
| | 〃 | 宮武 昌史 | 上智大学 |
| | 〃 | 高橋 聡 | 名古屋電機工業 |

| D5 | 役職 | 氏名 | 所属 |
|----|-----|-------|-------|
| | 主査 | 浜松 芳夫 | 日本大学 |
| | 副主査 | 結城 和明 | 東芝 |
| | 幹事 | 市川 紀充 | 工学院大学 |
| | 〃 | 古関 隆章 | 東京大学 |
| | 〃 | 鈴木 健嗣 | 筑波大学 |
| | 〃 | 山中 理 | 東芝 |
| | 〃 | | |

7

英文論文誌論文委員会体制紹介

英文論文誌編修長 大石 潔(長岡技術科学大学)

Power Electronics and Its Applications

| D6 | 役職 | 氏名 | 所属 |
|----|-----|------|----------|
| | 主査 | 藤田英明 | 東京工業大学 |
| | 副主査 | 横山智紀 | 東京電機大学 |
| | 幹事 | 芳賀 仁 | 長岡技術科学大学 |

Electric Machine, Motor Drive and their Applications

| D8 | 役職 | 氏名 | 所属 |
|----|-------|-------|---------|
| | 主査 | 小坂 卓 | 名古屋工業大学 |
| | 副主査 | 久保田寿夫 | 明治大学 |
| | 幹事 | 近藤圭一郎 | 千葉大学 |
| | 〃 | 真田 雅之 | 大阪府立大学 |
| 〃 | 鳥羽 章夫 | 富士電機 | |

Motion Control, Robotics, Sensing and their Applications

| D7 | 役職 | 氏名 | 所属 |
|----|------|------|--------|
| | 主査 | 藤本康孝 | 横浜国立大学 |
| | 副主査 | 柴田昌明 | 成蹊大学 |
| | 幹事 | 石川 潤 | 東京電機大学 |
| 〃 | 残間忠直 | 千葉大学 | |

- 気軽に投稿できる論文誌！
- 読みたくなる論文！

論文の著者と査読者の共通認識が重要です

- 有用性、新規性、創造性で判断する
- 電子ジャーナルにふさわしい論文題名、アブストになっているかを考えよう

9

本日の出席予定者数

| | 委員数 | 出席者 | 欠席者 | 未定 |
|--------|----------|----------|-----|-----|
| D1 | 114 | 18 | 30 | 66 |
| D2 | 103 | 14 | 34 | 55 |
| D3 | 143 | 25 | 46 | 72 |
| D4 | 14 | 4 | 1 | 9 |
| D5 | 17 | 4 | 3 | 10 |
| D6 | 3 | 1 | 0 | 2 |
| D7 | 4 | 2 | 0 | 2 |
| D8 | 5 | 2 | 1 | 2 |
| 編修広報委員 | 36 | 4 | 7 | 25 |
| 合計 | 439(重複含) | 74(重複なし) | 122 | 243 |

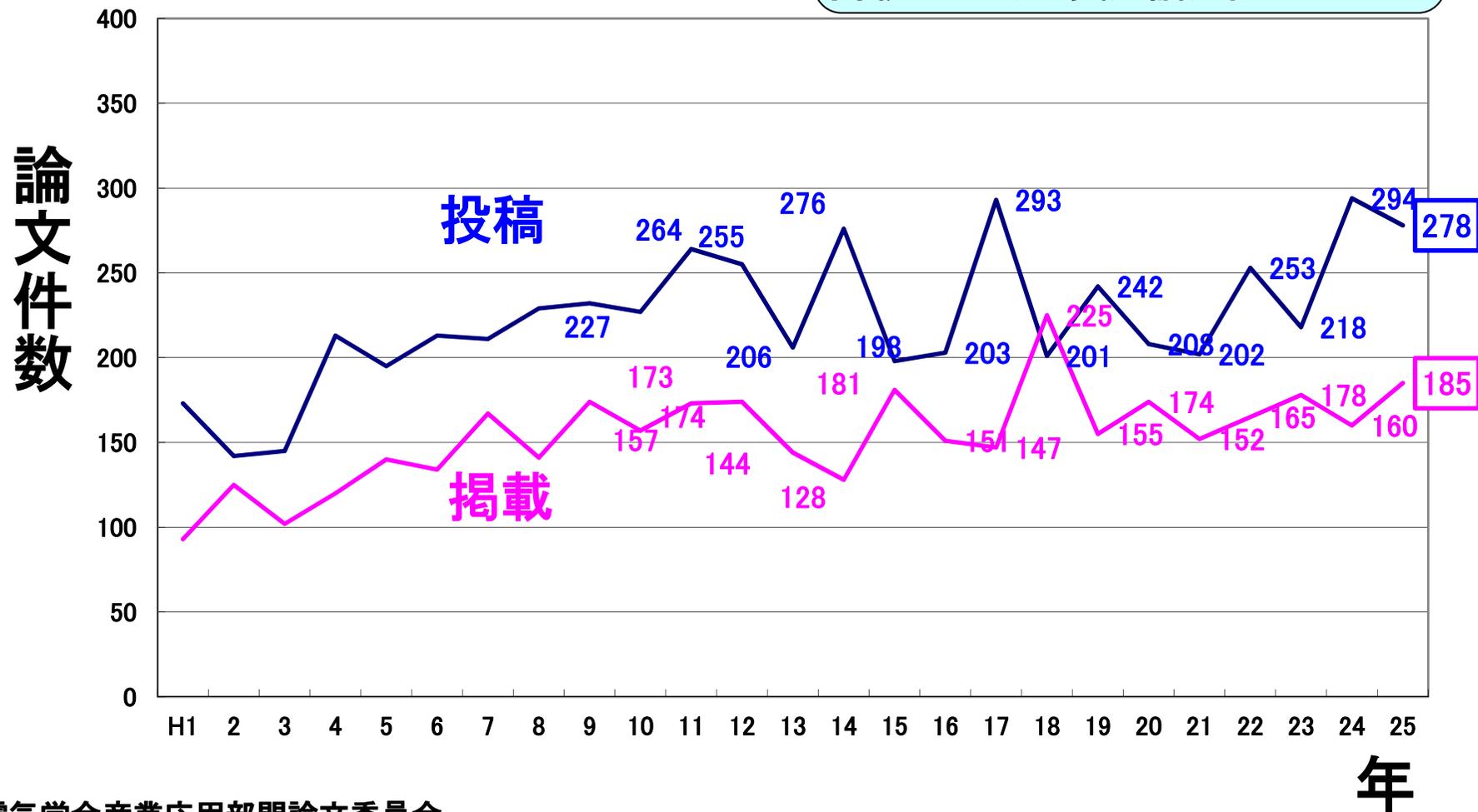
出席者総数:74名 ('13年:70名, '12年: 72名)

10 和文論文誌・英文論文誌の論文投稿・ 掲載状況について

11

D部門 論文投稿・掲載件数の推移

平成25年
 投稿278
 掲載185(うち英文論文誌D 40)



12 IEEJ Journal of Industry Applications (電気学会英文論文誌D)

- 平成24年7月から発刊(隔月)
- アメリカThomson社の“Science Citation Index Expanded (TM)(SCI)”に取得を目標

2013年 1月 「Motion Control and its Related Technologies」

2013年11月 「Technologies of Rotating Machinery」

2014年 3月 「Motor Drive and its Related Technologies」

2014年 7月 「Power Electronics」

2014年 11月 「Technologies of Rotating Machinery」

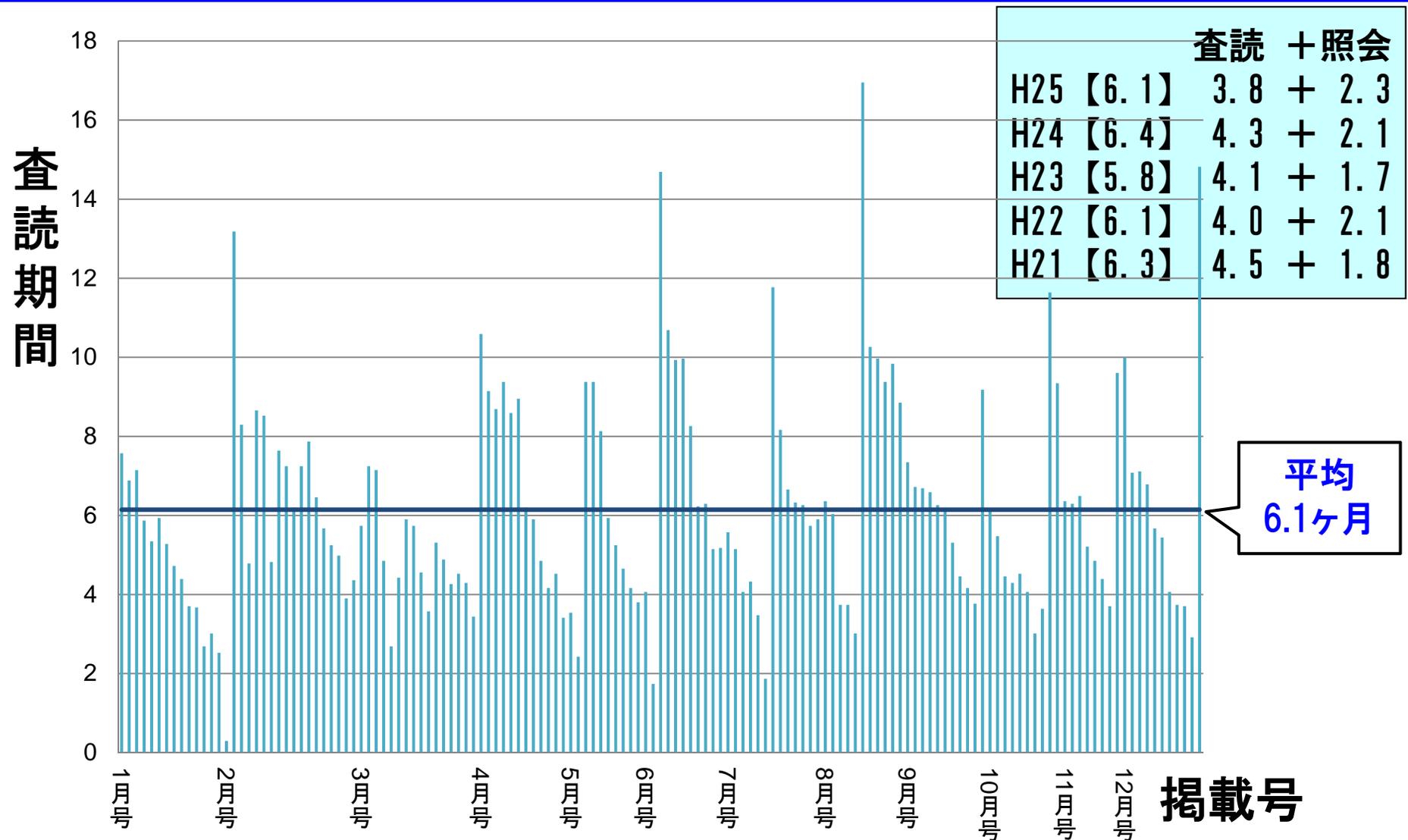
2015年 1月 「Motion Control and its Related Technologies」

2015年 5月、7月「国際会議IPEC2014-Hiroshima」

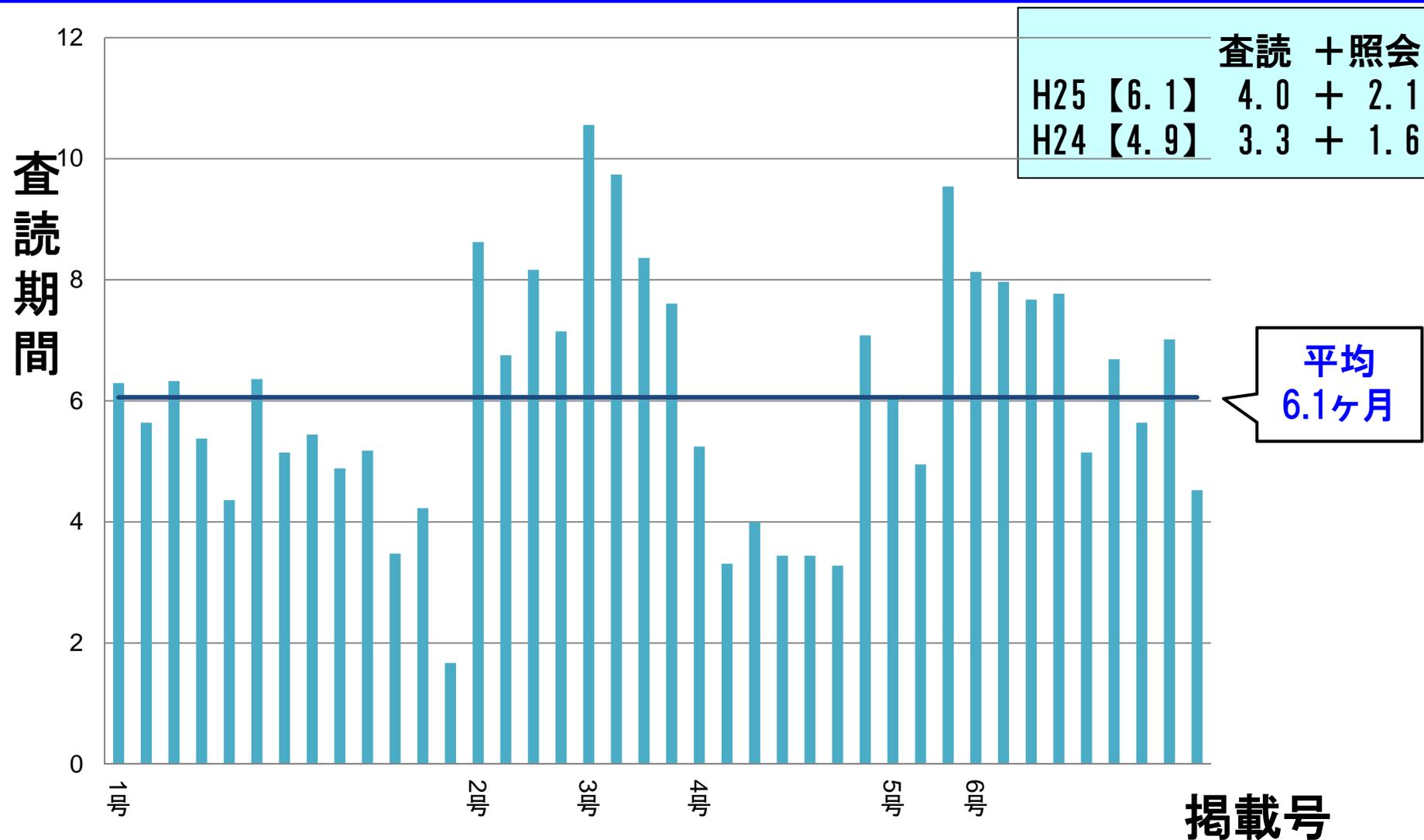
参考: 共通英文誌

平成25年D部門関連の一般論文投稿が35件

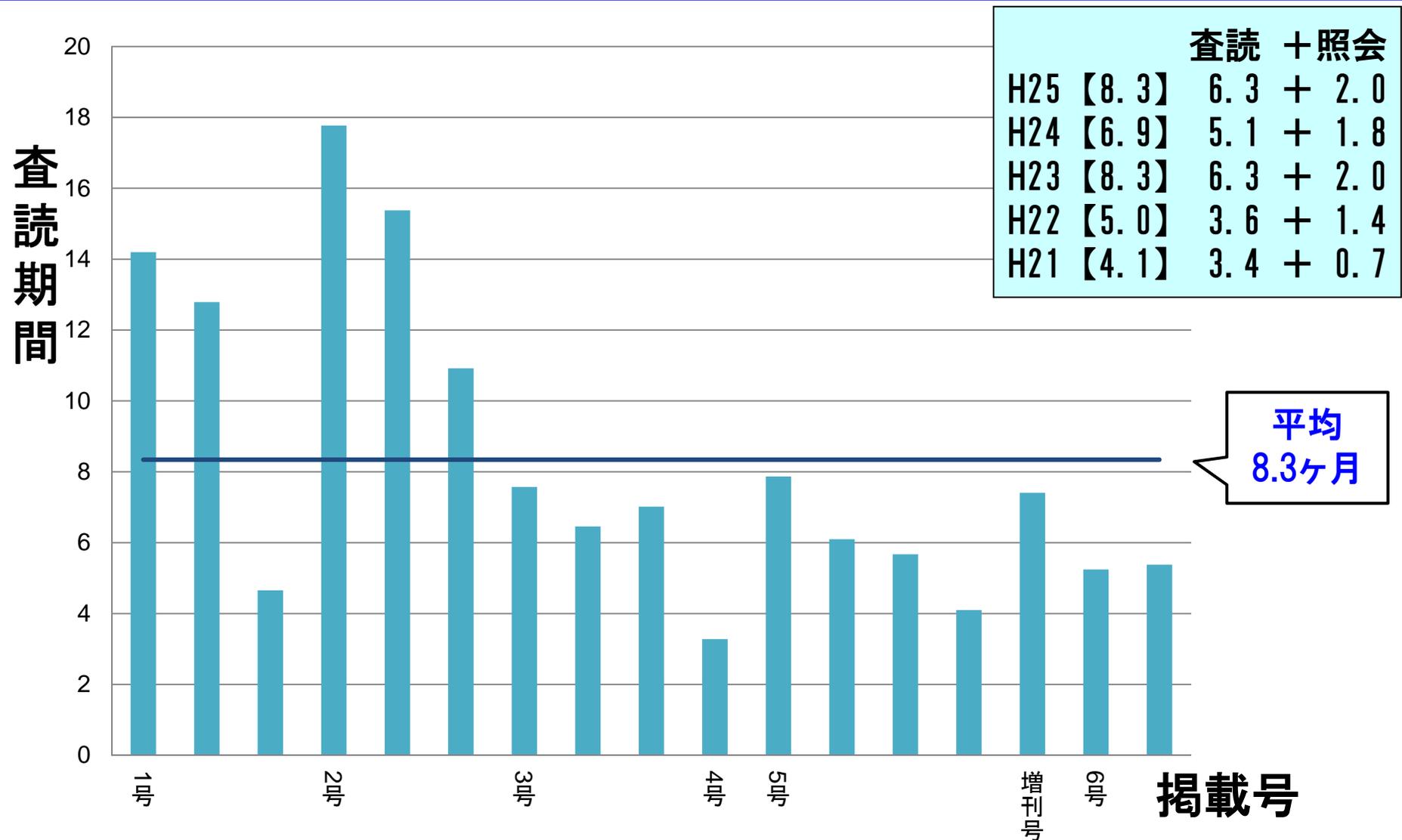
論文誌D(論文) 論文掲載までの所要月数



英文論文誌D(論文) 論文掲載までの所要月数



共通英文論文誌(D部門投稿論文) 論文掲載までの所要月数



16 電子査読システムの運用状況について

副編修長 寺田賢治
(徳島大学)

18 電子投稿・査読システム運用状況 (2013年8月～2014年7月)

- 2012年10月より、「新サーバー」稼動
 - 旧サーバ:2013年10月28日が最後
- 2012年12月で、「2名再査読制」試行終了
(電気学会全体のフローに統合)
 - 2名再査読制:2014年2月25日が最後
 - 問題点:著者側にメリットがない
 - 著者に不利益なケースが生じた
 - 採否決定までの所要期間がのびた

編修長

森本 雅之
(東海大学)

- 目的
 - 論文査読の基準を明確にすること。
 - 論文投稿者と査読者が論文に対して共通の認識を持つこと。

- 査読期間を短縮すること。
- 査読に対する不公平感をなくすこと。

-
- 論文の内容に対する全責任は投稿者にある。
 - 論文の査読は論文指導ではない。
 - 論文の価値の評価をするのは査読者ではなく、読者である。
 - 投稿者は評価に耐えられる論文を作る。
 - 査読者は論文を早く、正しく処理する。
 - 次の論文を出したくなるような査読をする。
 - 何でも掲載すればよいというのではない。
 - 論文誌のレベルが下がれば投稿する魅力もなくなる。

21 査読の要点(論文が備えるべき要件)

- 電気学術または技術に寄与するか
- 新規性, 創造性, 有用性のいずれか1つが認められるか
技術面だけでなく, 考え方, 応用上の問題点の指摘など, 広い観点からの新規性, 創造性, 有用性の判断がポイント
- 明白な誤り, 矛盾点がないか。論旨が一貫しているか。まえがきで指摘した問題点が, むすびで結論付けられているか
- 同一内容が発表されていないか

-
- 判定は4段階とし、以下の基準による。
 - ① エディトリアルな修正のみ：
掲載(A判定)
 - ② 修正内容が推奨項目(Suggested change)のみ：
条件付き掲載(照会后掲載)(B判定)
 - ③ 修正内容に必須項目(Mandatory change)を含む：
照会后判定(C判定)
 - ④ 論文の要件を具備していない：
返送(D判定)

 - 照会后判定(C)は初回査読のみ選択可能

- ① 必須修正項目(Mandatory change),
 - ② 推奨修正項目(Suggested change),
 - ③ エディトリアルな修正項目(Editorial change)
- に分け, 判定の根拠を明確に記載する。
- ①の必須項目のある論文は, 照会后判定(C)とする。
 - ②の推奨項目と③の項目のみの論文は照会后掲載(B)とする。
 - ③の項目のみの論文は掲載(A)とする。

24 1回目の査読でA判定をつける場合の 判定の際の注意

- 電気学術または技術に寄与していることを記載する。
- 新規性, 創造性, 有用性のどれが認められるかを(複数でも良い), 明確に記載する。

- 理由を具体的に、明確に記載する。
- 客観的な証拠に欠けていると判断された論文については修正の上、新たな論文としての投稿を勧める。
- 新規性、創造性、有用性のいずれも有していないことを明確に説明する。

(例)

- 既に発表されている論文**との違い、優位性が無い、あるいは、同一内容である。
- 論文の目的・主張・効果などが、論文記載のシミュレーションや実験データでは確認できず、新規性、創造性、有用性のどれも認められない。
- 理論式の展開の**部分に誤りがある。

-
- 掲載決定論文の内容の変更は、原則として誤字、脱字、フォントの不一致など、editorialな修正を除いて一切認められない。掲載決定後、最終原稿で意図的に内容を追加したことが明らかになった場合には、掲載の決定を取り消す場合がある。
 - 査読マニュアルの内容は、常に改善してゆきます。
 - Extended Summaryは英文誌の発刊もあり廃止しました。

27 昨年度、意見交換会でのご指摘への その後の対応

- 査読者へのお礼→電子ジャーナルにPDFで掲載されていることが判明しましたが、同じものをニューズレター3月号に掲載しました。
- 査読者にルールやフローを把握させる→査読マニュアルを全論文委員へ送付しました。新任の論文委員には主査から送付することとしました。なお査読マニュアルは産業応用部門論文委員会のページ<http://www2.iee.or.jp/~ias/d-ron/sadoku/>からリンクできます。
- 査読功労賞の推薦方法→部門としての推薦方法はまだ申し合わせができていませんが、論文委員会主査会として基準を決めて推薦しています。正式には部門の役員会で決定されます。

和文誌編修長 森本 雅之
(東海大学)

英文誌編修長 大石 潔
(長岡技術科学大学)

- | | |
|--------------|----|
| ● 査読期間について | 3件 |
| ● 査読システムについて | 1件 |
| ● 投稿の活発化について | 2件 |
| ● 論文の中身、書き方 | 2件 |

合計8件, ご意見・ご質問を頂戴しました。
ありがとうございました。

H25年:12件, H24年:11件, H23年:3件

- Q1: 論文幹事ごとに1論文にかかる日数や判定結果にどの程度のばらつきがあるか、公表できなくとも主査や編修長の方でチェックを行う仕組みを導入して頂ければと思います。
- Q2: 査読に関しては、迅速な査読ができていると思います。今後ともタイムリーな論文掲載お願いいたします。
- Q3: 当機関から投稿した論文の査読過程において、査読依頼のメールを放置し、査読の受諾可否の決定だけで1ヶ月以上費やした例がありました。編集部に連絡して対応してもらいましたが、このようなことが発生しないよう、対策頂きたいです

査読期間はもっと短縮したいと考えていますが、現状はそれほど問題にならない程度になっており、特殊なケースだけ長くかかっていると考えています。査読期間を決める大きな要因は査読システムや幹事の動きではなく査読者にかかっています。皆様の迅速な査読をお願いいたします。

また、照会に要する期間が査読期間の1/3程度を占めていることをご認識願います。

32 【ご意見・ご質問】 査読システムについて

Q4:IEEEの査読システムのように, Editorの判定結果が査読者(全員)に分かるシステムに改善して頂きたいと思っています。査読した論文が, 最終的にどのような判定になったのか, 現状のシステムでは不明です。

現在の査読システム上では査読結果を他の査読者に開示するということはできません。

D部門の査読方法は電気学会論文査読システムの統一ルールを用いています。統一ルールでは、開示することについて議論は行われておりません。

ただし、ご意見の趣旨は理解できますので論文委員会主査会で議論させていただきます。

Q5: 企業からの投稿がしやすい雰囲気をもたせたいかと思われる。(技術委員会内でもそのような話が出ている) 投稿料などのアカデミックディスカウントならぬ、企業ディスカウントもあっても良いのではないか。そうしないと企業からの投稿がギリ貧だと思われる。

Q6: 英文論文誌の採択基準について質問です。

IEEEの国際会議に採択された論文をそのまま英文論文誌に投稿することは可能なのでしょうか。もちろん査読プロセスを経て、revise入ると思いますが。

【回答】 投稿の活発化

投稿料を下げれば投稿数が増えるという単純な話ならすぐにでも打ち手を考えます。論文を出すことに企業がメリットを感じていないことがそもそも問題であると思います。分野によって企業の論文に対する考え方が異なっています。企業からの論文の増加方策を各技術委員会で議論してほしいと考えています。

一つの方策がD4-D6の応用分野の和文誌特集号です。論文委員会としては応用分野の論文を歓迎し、論文の「有用性」で評価するように査読者をお願いしています。是非特集号を企画提案してください。

IEEEの国際会議は、著作権が電気学会に許諾されていないケースがほとんどです。論文を投稿する件については著作権に対する考え方の詳細な説明を近々D部門ニュースレターに掲載しますのでご覧ください。ポイントは会議の論文集の著作権がどこにあるか、です。部門大会、全国大会で発表した内容をそのまま投稿することはOKです。

- Q7: 著者が修正原稿を提出する際、変更箇所を赤字で示してもらうように明文化できないものでしょうか？ どこを修正したのか、査読者が分かりやすくなると思います。
- Q8: 査読をしていて、最近の投稿論文の中には、学術論文の体をなしていないものがあり、内容以前に論文としてのまとめ方そのものを再考してほしいものに出くわすことが多々あります。論文主題の問題点或は課題の設定、問題解決のための前提、解決のための理論とその検証、得られた成果の検証、少なくともこういう基本構成をきちんと踏んで欲しいものです。しかし、現状の査読規定では、こういう指導はしてはいけないという事ですので、ひどい構成の論文もオーケーとせざるを得ません。

部門誌の論文は、研究記録あるいは実験記録とは本質的に違うものであって、やった順番に正確に記述しても、それは学術論文ではありません。大学の先生のお名前があるにも拘らず、実験記録的な論文も散見されます。結果的に部門論文誌の品格を落とすことになっていると懸念する次第です。同じような問題意識をお持ちの方は僕以外に他にも居られます。

投稿数増加の為に、昔々、「論文」の他に「リサーチペーパー」というジャンルを設けて論文誌に掲載するという議論もありました。ご参考までに。

論文の内容に関する責任は一切著者にあります。論文の指導をしてしまうと共著者になります。査読者としては論文の論旨、目的、結論などが分からない、書き方が未熟な場合などを除いて、内容について意見を申し上げられません。その場合でも、新規性、創造性、有用性のすべてがまったく分からない場合は、D判定となります。論文指導はできません。ただし、論文の体裁が多少劣っても、論文の論旨、目的、結論が分かれば、新規性、創造性、有用性の判断をお願い申し上げます。

また、論文そのものの以外で、回答文の書き方、査読者に読みやすくするような工夫や礼儀についても、十分に「しつけ」されていない著者も多く見られます。さらに、文章が稚拙な論文も多くなっています。これは教員も含めての大学の学力低下も原因していると思います。著者の質向上のために論文委員会として何ができるかをこれから考えてゆきたいと思っています。

38

フリーディスカッション

終了時間:13:10

これにて意見交換会を終了します

ありがとうございました